
桜の木

ミルクココア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の木

【著者名】

ミルクココア

【あらすじ】

入学式の日。桜の木の下で出会った彼は、どこか様子が変だった。桜の木を悲しそうに見上げる彼が気にかかっていた私は……？

見上げると、空が綺麗に晴れていた。

少し、わくわくした。

ぽかぽかとした日差しをあびながら、私は、真新しいセーラー服に身を包んで、道を歩いた。

今日から、高校生活が始まる。

今までとは違う生活に、ドキドキする。

校門から校舎に向かつて、ピンク色の桜並木が続いていた。はらはらと舞う桜の花びらに見惚れ、私は足を止める。

桜の花びらが舞う中に、一人の少年がいた。

すりりとした手足が、とても美しく、やわらかそうな黒髪の間から見える瞳は、まだ幼さを残していた。少年も、まだ新しそうな学生服を身に着けていた。

彼も、私と同じように、足を止めて、大きな桜の木を見上げていた。

私は彼に近づくと、思い切って声をかけた。

「桜、綺麗ですね」

彼は、驚いたよつこひらを振り向くと、少し、顔を背けて返事をした。

「そう、ですね……」

やや強張った声だった。彼は、私が次の言葉をかける間もなく、足早に立ち去ってしまった。

私は、彼と同じクラスだった。

桜のことと、彼が気に触るようなことを言ってしまったかも知れない、私は気に病んでいた。

しかし、それは杞憂のようで、彼は、クラスメイトたちといつもにこにこした表情で話をしていた。私とさえも。

美しい顔立ちをした優しい彼は、たちまち、クラスの人気者になつた。

ひそかに彼に思いを寄せる子も多いようで、料理部に入ったクラスの少女たちが、彼にクッキーを渡していくところを目撃したことある。

私も、少しだけ、彼のことが気になっていた。

桜の花びらに包まれた彼が、あまりにも綺麗で、私は、あの時、一目惚れしてしまつたのだ。

けれども、思いを伝えようという気持ちは起きなかつた。

入学式の日の彼の悲しそうな声が、私の心を引きとめた。私が、ただのクラスメイトという一線を越えようとして、もしも彼に深くかかるうとしてしまつたら、もう一度、彼の気持ちを沈ませてしまうのではないかと、怖かつたのだ。

桜の花は、4月が終わる前に散つてしまつた。

今は、黄緑色をした小さな若葉が、桜の木に茂つていた。

毎日、毎日、少しずつ葉が大きくなる。

桜色の木も綺麗だつたけれど、緑が増えていく木々を見るのも、私は楽しみだつた。

そんなある日、彼がまた、桜の木を見上げているのを目撃した。

彼の表情は、少し陰りを見せていた。

なぜ、彼は、見ていると悲しくなる桜の木を、立ち止まって眺めているのだろう。

私にはそれが、どうしても分からなかつた。

彼はしばらく桜の木の前で立ち止まつていたが、登校してくる生徒たちが増えると、彼は再び歩き出した。

私は、彼が昇降口に入つて見えなくなるまで、後姿を見送つていた。

彼は教室で、いつも笑つている。

笑つていると言つても、大笑いをしているのではなくて、彼は、ただ綺麗に微笑んでいるのだ。

どんな時でも、見ているこちらの心まで温かくなるような笑顔をしてくれる。

彼の悲しそうな顔を、教室では見たことがないので、私はますます、彼のことが分からなくなつた。

翌日、雨の中で、桜の木の前でたたずむ彼を見つけて、私は、嫌われるのを覚悟して話しかけた。

私は、理由が知りたかった。

「どうして、桜を見ているの？」

彼は、私の声を聞いて、一瞬、びくりとした。けれども、今度はこちらの方を振り向かず、桜の木を見上げたまま呟いた。

「……綺麗だから」

「うん、私もそう思う。でも、あなた、いつも悲しそうな顔で見ているから、どうしてかなつて」

彼は、すぐに返事をしなかつた。

傘の上で、雨粒が跳ねる音だけが、しばらく聞こえた。

「悲しいわけじゃないよ」

彼は、私にそう答えた。桜の木を眺めるのを止めて、彼は、校舎に向かつて歩き出した。私は、慌てて後を追う。

「そうなの？」

「いつ見ても綺麗だから、ただ、羨ましかったんだ。それだけだよ」「羨ましい…………？」

私は驚いた。いつ見ても綺麗なのは、彼も同じだ。
羨ましがる必要なんて、ないのに。

「羨ましがらなくたって……、あなただけて、クラスの女の子たちに、人気あるでしょう。いつもにこにこして、優しくて、綺麗な顔をしているから」

私は、思わず、彼に反論をしてしまった。

「どうかな。僕は綺麗じやないよ。作り笑顔も優しい振りするのも、ただ皆が怖いからだ」

彼は暗い表情で、うつむいた。

「笑っている僕がいいと思うのなら、君も、今の僕を見て嫌いになつただろう」「

「そんなことないわ。いつも笑っているあなたも素敵だけれど、正直な気持ちを話しているあなたも、とても綺麗よ」

それに、と、私は顔を赤らめながら続けた。

「あなたを嫌いになんてならないわ。だって私、あなたのことが好きだもの」

彼の返事を聞く前に、私は、雨の中、昇降口へと駆け出した。

また、教室で会うことになるのは分かっていたし、今までに、彼に告白してきた少女たちのように、『恋に興味はないんだ』と彼に振られるのも分かつていただれど、するつもりのなかつた告白をしてしまった私には、彼の答えを聞くのが怖くなつたのだ。

休み時間も授業中も、彼は、いつもと変わった様子はなかつた。みんなの前でにこにこして、私にも普通に挨拶をしてきた。

私は彼の顔を、近くでよく見ることができなかつたけれど、彼に
は何の変化もなさそうだ。

これならもしかして、返事を聞かずにするかも思つて
いたのだが、放課後、学校から帰る前に、彼が私に話しかけてきた
のだ。

「ねえ、朝の話だけ?」

私は彼の方を見ることができなかつた。朝の話、という単語を聞
いた途端、体が固まつたのだ。

「……ありがとう」

彼は、それだけ言つと、4つに折りたたんだ小さな白い紙切れを
私の机に置いて、部活へ行つてしまつた。

紙切れには、端正な字で短い文章が書かれていた。

『君は知らないかもしれないけれど、入学式の日、桜の木の下にい
る君も、綺麗だと思った。』

僕も君が好きだ。僕を好きになつてくれて、ありがとう』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7401m/>

桜の木

2010年10月8日14時02分発行